

(3) オンライン依存症自助グループ「アディクション・ぽーと」の運営と評価

研究分担者：保坂 嘉成(西武文理大学看護学部)

研究協力者：福正 大輔(特定非営利活動法人ぷれいす東京)

研究 要 旨

薬物依存を抱える HIV 陽性者は、社会復帰において多層的な「生きづらさ」に直面している。本研究は、当事者の主観的経験に基づき、その困難の構造を質的に記述することを目的とした。質的記述的デザインを採用し、薬物使用歴のある HIV 陽性者 6 名に対して半構成面接を実施、内容分析を行った。分析の結果、【二重のスティグマの内在化】、【社会的孤立と経済的不安】、【レジリエンスと支援資源】の 3 つの主要カテゴリが抽出された。社会的排除の経験は自己否定感を深化させ、断絶された人間関係や不安定な雇用が生活基盤を脆弱化させていた。一方で、ピアサポートによる再生や選択的な自己開示が、スティグマ環境下での心理的安全性とレジリエンスを支えていることが示唆された。統合的な支援モデルの構築には、差別構造への介入と当事者主導のピアサポートネットワークの強化が不可欠である。

A 研究目的

我が国における新規 HIV 報告の多くを MSM が占めており、近年はこれに伴う薬物依存の問題も顕著となっている。HIV 陽性と薬物依存の併存は、治療継続率の低下、社会的孤立、就労機会の喪失といった多面的な困難を引き起こし、二重のスティグマ(社会的汚名)が生きづらさを増幅させることが国内外で指摘されている¹⁾。

厚生労働行政においては、誰もが適切な医療・支援を享受できる「包括的支援体制の構築」が喫緊の課題であるが、日本における当事者の主観的な経験に基づく実証的な知見は依然として乏しい。適切な支援の在り方を検討するための理論的枠組みの構築は急務である。本研究は、薬物依存を有する HIV 陽性者が抱える生きづらさの内容を質的に記述し、社会的スティグマが当事者の心理社会的プロセスにどのように作用するかを明らかにすることを目的とする。特に、差別や偏見が当事者の自己認識や日常生活にいかなる影響を及ぼし、どのようなメカニズムで生きづらさが生成されているのかを構造的に解明し、包括的サポートの実現に資する知見を提供することを目指す。

B 研究方法

本研究は質的記述的デザインを採用し、内容分析的手法を用いてデータを解析した²⁾。対象者は、薬物使用歴があり HIV 陽性である者 6 名とした。参加者の募集は、LGBTQ+ コミュニティ向けのオンラインプラットフォームおよび認定 NPO 法人ぷれいす東京の協力を得て Web を通じて実施した。データ収集には半構成面接を用い、1 回あたり 30 分から 60 分程度の聞き取りを行った。インタビューガイドに基づき、HIV 感染および薬物依存に伴う生きづらさ、二重のスティグマの影響、支援資源の活用状況、社会構造的要因について詳細な記述を得た。録音した音声は逐語録化し、オープンコーディングによる概念抽出、類似コードの統合による主要カテゴリの生成、抽出テーマの統合的解釈というプロセスを経て分析を行った³⁾。

(倫理面への配慮)

本研究は西武文理大学倫理委員会の承認(承認番号 06N-F4)を受け、ヘルシンキ宣言および「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」を遵守して実施した。参加者には文書と口頭で説明を行い、

自由意志に基づくインフォームド・コンセントを得るとともに、個人が特定されないよう匿名化を徹底した。

C 研究結果

内容分析の結果、薬物依存を有する HIV 陽性者の生きづらさの構造として、【3つの主要カテゴリ】と【6つのサブカテゴリ】が抽出された。

1. 【二重のスティグマの内在化と心理的侵食】

当事者は、HIV 感染と薬物依存という二重の汚名を背負うことで、自己認識が著しく歪められるプロセスを経験していた。

《社会的排除の経験》：外部からの拒絶が、当事者の居場所を奪う直接的な要因となっていた。対象者は「薬のことで HIV のことが知られた途端、急にみんな距離を取り、昨日まで普通に話していたのにいきなり避けられるようになった」と語り、社会的なまなざしが突如として排除へと変わる衝撃を表現した。家族や友人からの拒絶、医療・支援現場での冷淡さは、当事者に「自分には居場所がない」という強い疎外感を与えていた。

《自己否定感の深化》：外部からの偏見のまなざしをフィルターのように内面に取り込むことで、自己像が傷つくプロセスが見られた。ある対象者は「普通の人みたいに結婚して家庭を持つとか、もう自分には許されていないような気がして。生きてる意味って何だろうって、ふと考えてしまいます」と述べ、社会規範からの逸脱を自らの存在価値の否定に結びつけていた。これは、二重の負荷が「拒絶されるのは自分が悪い」という歪められた自己認識を生み、存在の根底を揺るがす侵食の構造を示している。

2. 【社会的孤立と経済的不安による生存基盤の脆弱化】

スティグマを回避しようとする行動が、結果的に社会資源からの遮断を招き、生存そのものを脅かしていた。

《断絶された人間関係と二重生活》：薬物使用による逮捕や発覚を機に、以前の関係が崩壊する事例が目立った。当事者は「友だちには薬で捕まったときに一度に離れていきました。HIV のことなんて、とてもじゃないけど言えません。余計に誰もいなくなる気がして」

と語り、さらなる拒絶を恐れて本音を隠し、誰にも頼れない慢性的な孤立状態に置かれている。

《不安定な就労・住居と社会的選別》：差別的選別により、物理的な生活基盤が損なわれていた。対象者は「薬の履歴があるって話したら、面接で露骨に顔つきが変わって、また連絡します、で終わりです。就労も長続きせず、収入が不安定な時期が続きました」と吐露した。いつ仕事を失うか、住まいを追い出されるかわからないという物理的・経済的側面での不安は、当事者を一人で不安定な生活を支えざるを得ない窮地へと追い込んでいた。

3. 【レジリエンスと支援資源の機能】

過酷な状況下でも、逆境で折れずに生き抜くためのリソースも確認された。

《サポートによる再生と共通の人間性》：ピアサポートによる共通の経験が、再生の鍵となっていた。対象者は「同じように薬と HIV を経験している人の話を聞いたとき、自分だけじゃなかったんだって初めて思えました。そのとき、少しだけ生きていてもいいのかなって感じました」と語り、仲間との出会いが自己肯定感の回復における強力な支援資源となることが示された。

《選択的自己開示と心理的安全性の構築》：誰にどこまで話すかを慎重に選び、心を保護しながら繋がる対処行動が見られた。ある当事者は「職場では HIV のことは言っていません。言ったら働けなくなるかもしれないから。でも、通院先の医師や看護師には正直に話されていて、それが心の支えになっています」と述べ、信頼できる相手にだけ閉ざしていた扉を開けるプロセスを通じて、心理的な安全性を構築していた。

D 考察

本研究の結果、薬物依存と HIV 感染を併せ持つ当事者の生きづらさは、Goffman が提唱したスティグマ理論を地で行く、重層的な汚名の構造によって生成されていることが確認された⁴⁾。当事者が抱える生きづらさは、単なる差別体験の蓄積に留まらず、社会的な排除が自己否定へと刻まれる心理社会的な侵食のプロセスである⁵⁾。特に、薬物使用を自己治療(セルフメディケーション)として捉える視点に立てば、生き

づらさを解消するために薬物へ依存し、その結果さらに社会的排除を受けるという悪循環が浮かび上がる⁶⁾。

また、日本特有の社会文化的背景、特に「恥の意識」が強く作用し、当事者が問題を秘匿して孤立を深める傾向が顕著である。このような環境下では、個人の努力に依存するのではなく、差別構造そのものへの介入、すなわちマスメディアや法制度、医療現場における偏見の払拭が行政的課題として不可欠である。同時に、本研究で示された「サポートによる再生」のプロセスは極めて重要であり、当事者が安心して自己開示し、共通の経験を分かち合える場の確保がレジリエンスを支える基盤となる⁷⁾。今後は「アディクション・ぽーと」等のオンライン・オフライン双方の活動を継続し、当事者の心理的安全性を担保する包括的支援モデルの構築が求められる。

E 結論

薬物依存を有する HIV 陽性者の生きづらさは、二重スティグマの内在化、社会的孤立、経済的不安の三者が相互に作用し、当事者の自己肯定感を侵食する構造を持っている。一方で、ピアサポートネットワークを通じた回復のプロセスが、生きづらさを乗り越えるための重要なレジリエンス資源となることが明らかになった。統合的支援モデルの構築には、当事者に対する心理的アプローチだけでなく、社会的な差別構造への積極的な介入と、当事者主導のコミュニティ支援の強化が不可欠である。

引用文献

- 1) Stall RD, Purcell DW : Intertwining epidemics: a review of research on substance use among men who have sex with men and its connection to the AIDS epidemic. AIDS Behav 4 : 181-192, 2000.
- 2) Elo S, Kyngas H : The qualitative content analysis process. J Adv Nurs 62 : 107-115, 2008.
- 3) Orb A, Eisenhauer L, Wynaden D : Ethics in qualitative research. J Nurs Scholarsh 33 : 93-96, 2001.

4) Goffman E : Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, 1963.

5) Meyer IH : Prejudice, social stress, and mental health in lesbian, gay, and bisexual populations: conceptual issues and research evidence. Psychol Bull 129 : 674-697, 2003.

6) Halkitis PN, Parsons JT, Stirratt MJ : A double epidemic: crystal methamphetamine drug use in relation to HIV transmission among gay men. Health Psychol 41 : 17-35, 2001.

7) Corrigan PW, Watson AC : The paradox of self-stigma and mental illness. Clin Psychol Sci Pract 9 : 35-53, 2002.

F 研究発表

1) 保坂嘉成, 福正大輔, 生島嗣 : 薬物依存を有する HIV 陽性者の生きづらさに関する内容分析. 第 39 回 日本エイズ学会学術集会・総会(熊本), 2025.

G 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし